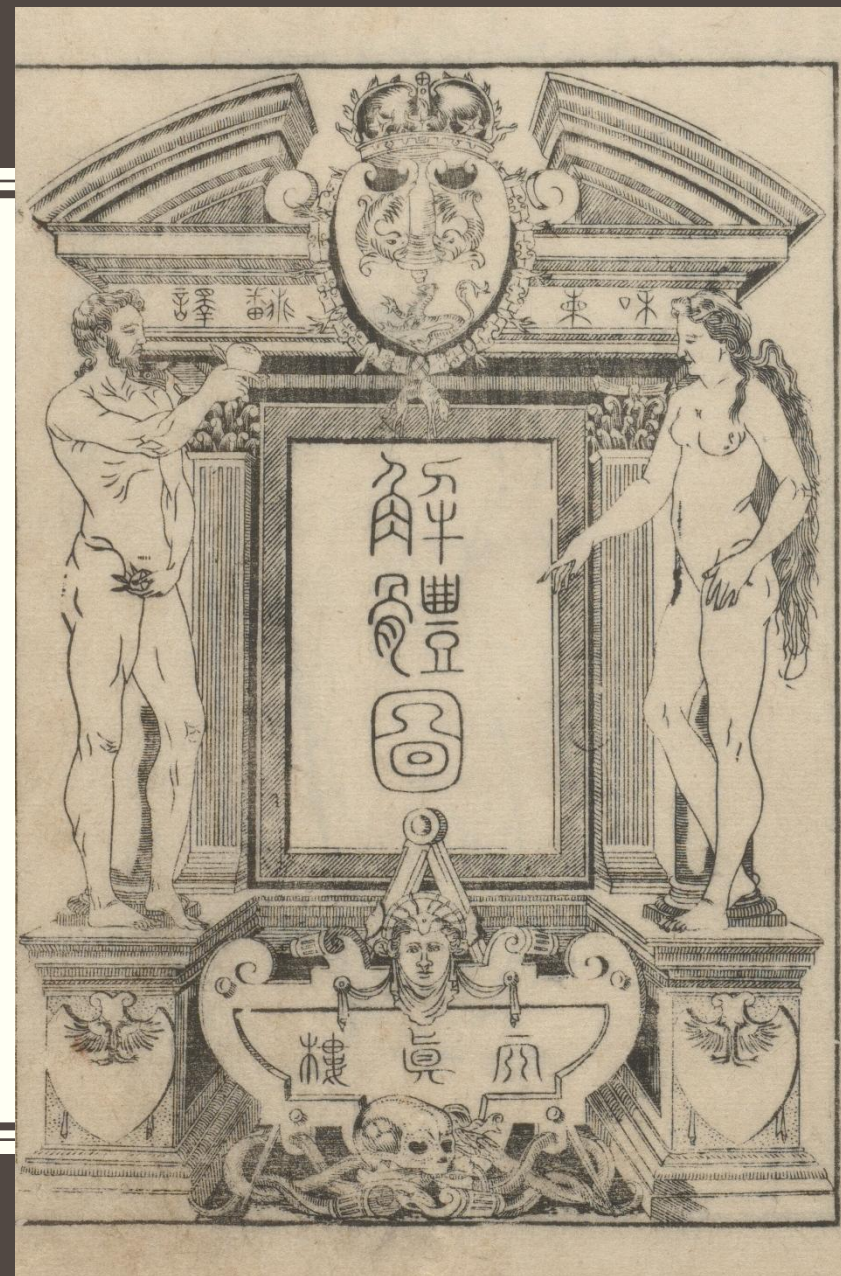


横浜市立大学 医学部  
オープンキャンパス2025

# 医学情報センター 貴重資料オンライン展示

令和7年7月28日～8月24日

## 医の心得



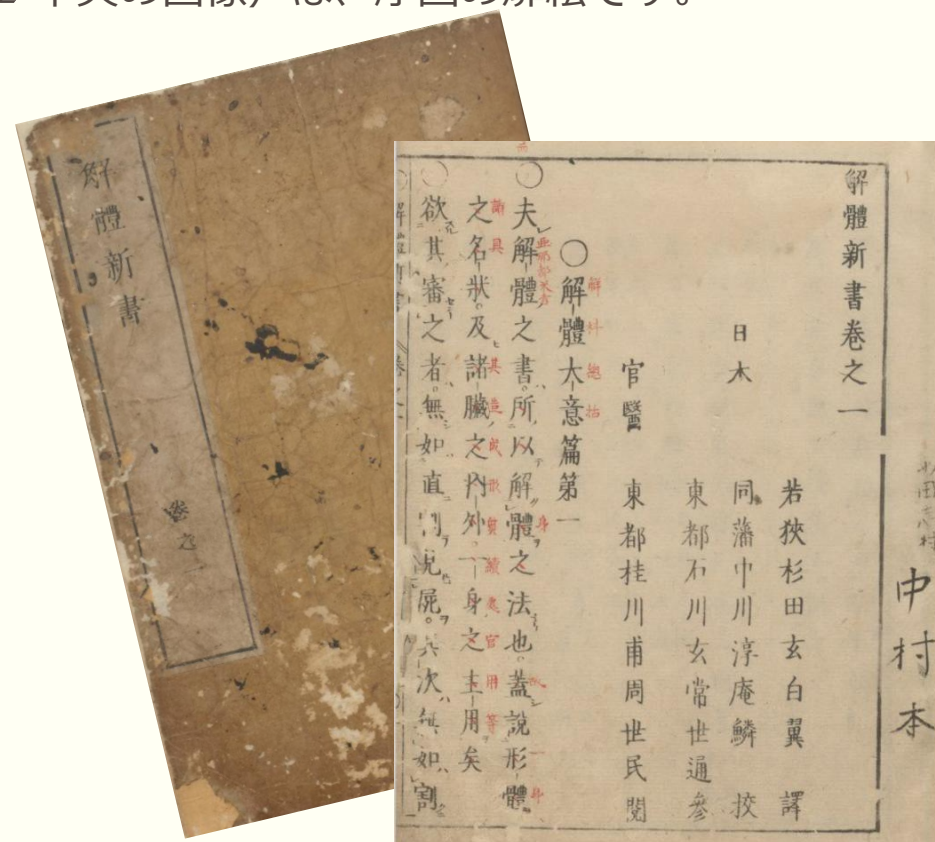
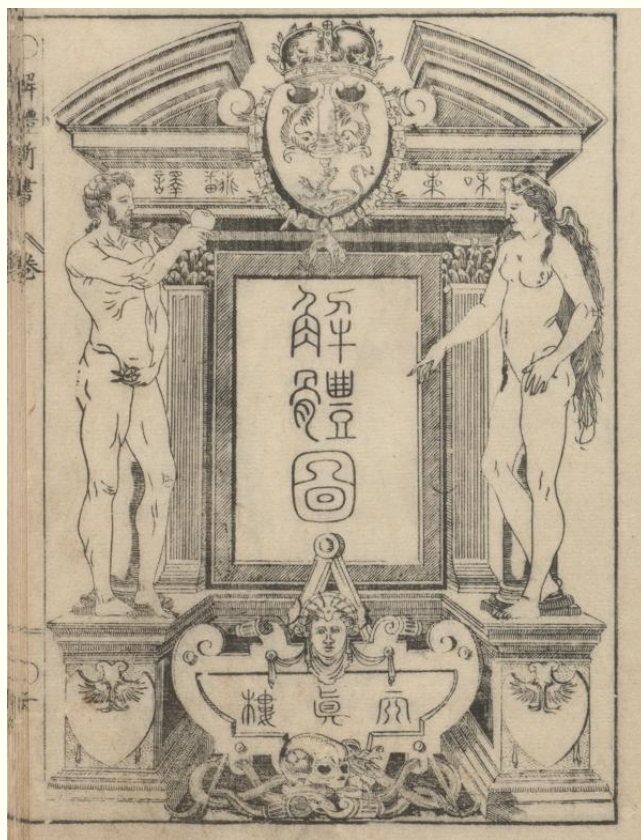


# 解體新書

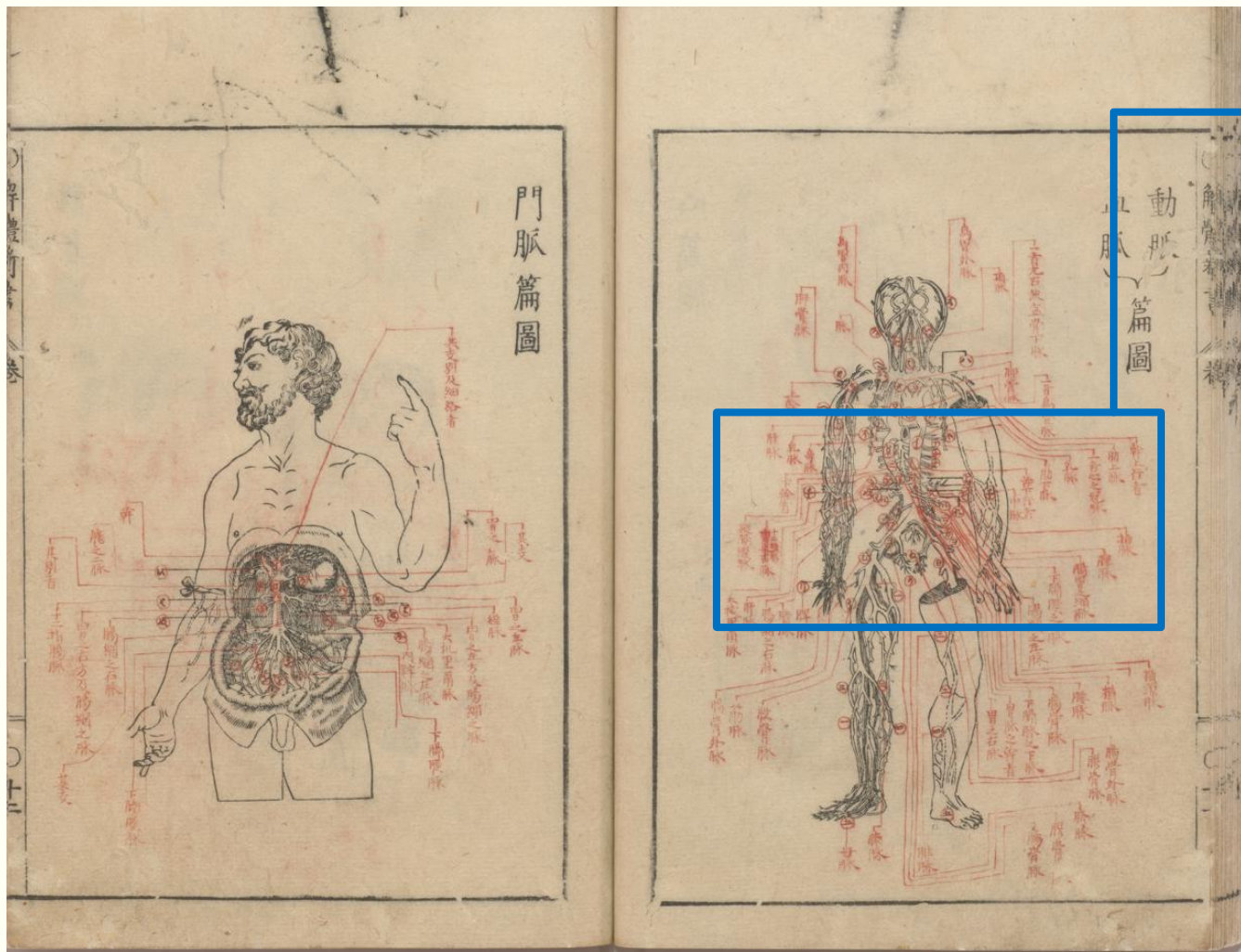
4 卷首 1 卷 5 冊

(独) 闕児武思 [Kulmus] 原著；杉田玄白 訳  
中川淳庵 校 小野田直武 画  
東武 須原屋市兵衛 安永 3 (1774) 年刊

ドイツ人医師のJohann Adam Kulmusの医学書『Anatomische Tabellen』のオランダ語訳である『Ontleedkundige Tafelen』(ターヘル・アナトミア)を前野良沢、杉田玄白等が翻訳した図書です。  
教科書などに掲載され、よく知られている図(✓中央の画像)は、序図の扉絵です。





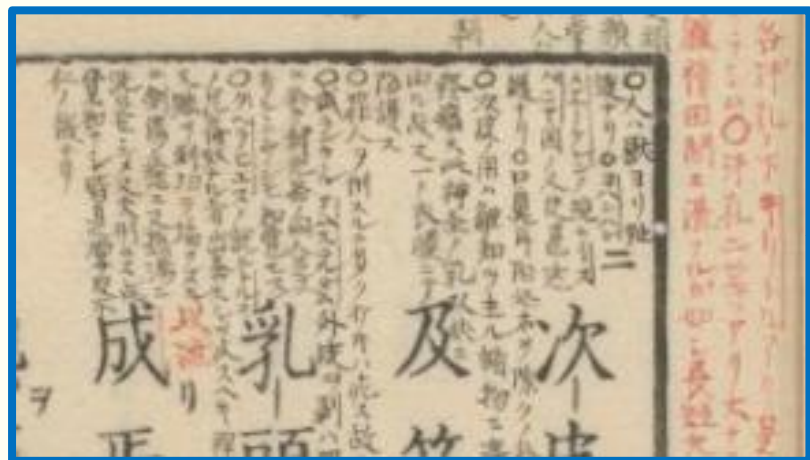


医学情報センターには、2組の「解体新書」が所蔵されています。そのうちの1組（鈴木文庫）の特筆すべき点は、膨大な量の書き込みです。

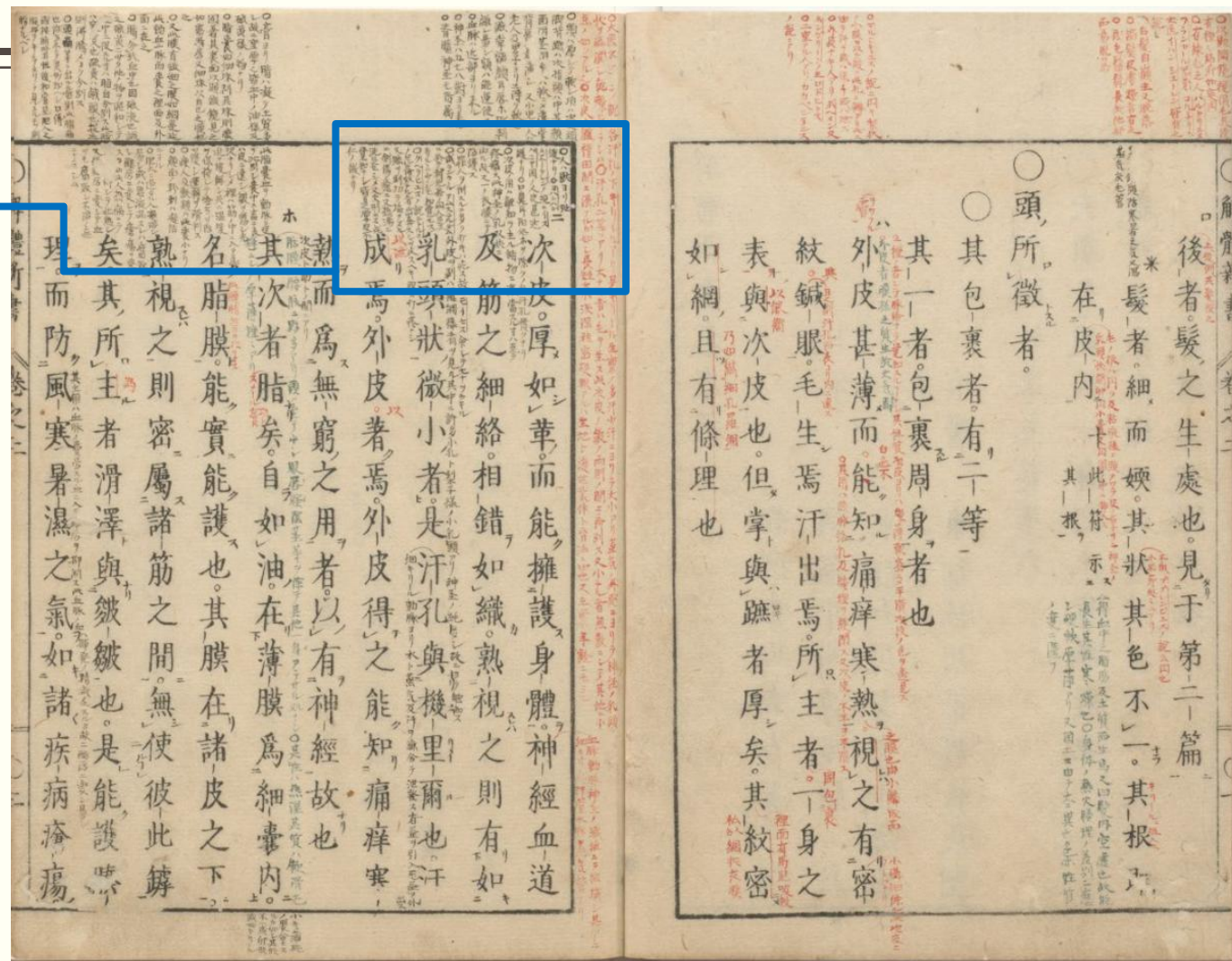
黒や赤の細かい文字は印刷等ではなく、医学を学ぶ元の所有者※によって細かい筆で手書きされたものです。

※1巻と序図に記名のある「小田志村 中村」氏と考えられます。





記述（漢文）に対応する日本語や、原書の註等が書き込まれ、元の所有者が熱心に勉学に励んだ様子が見て取れます。この書き込みは個人学習のためだけでなく、学んだ知識を持ち帰り、他の人に伝えるための**記録**としての意味もあったといえます。



# 杉田玄白自筆書状

4 月 25 日付弟子宛書状

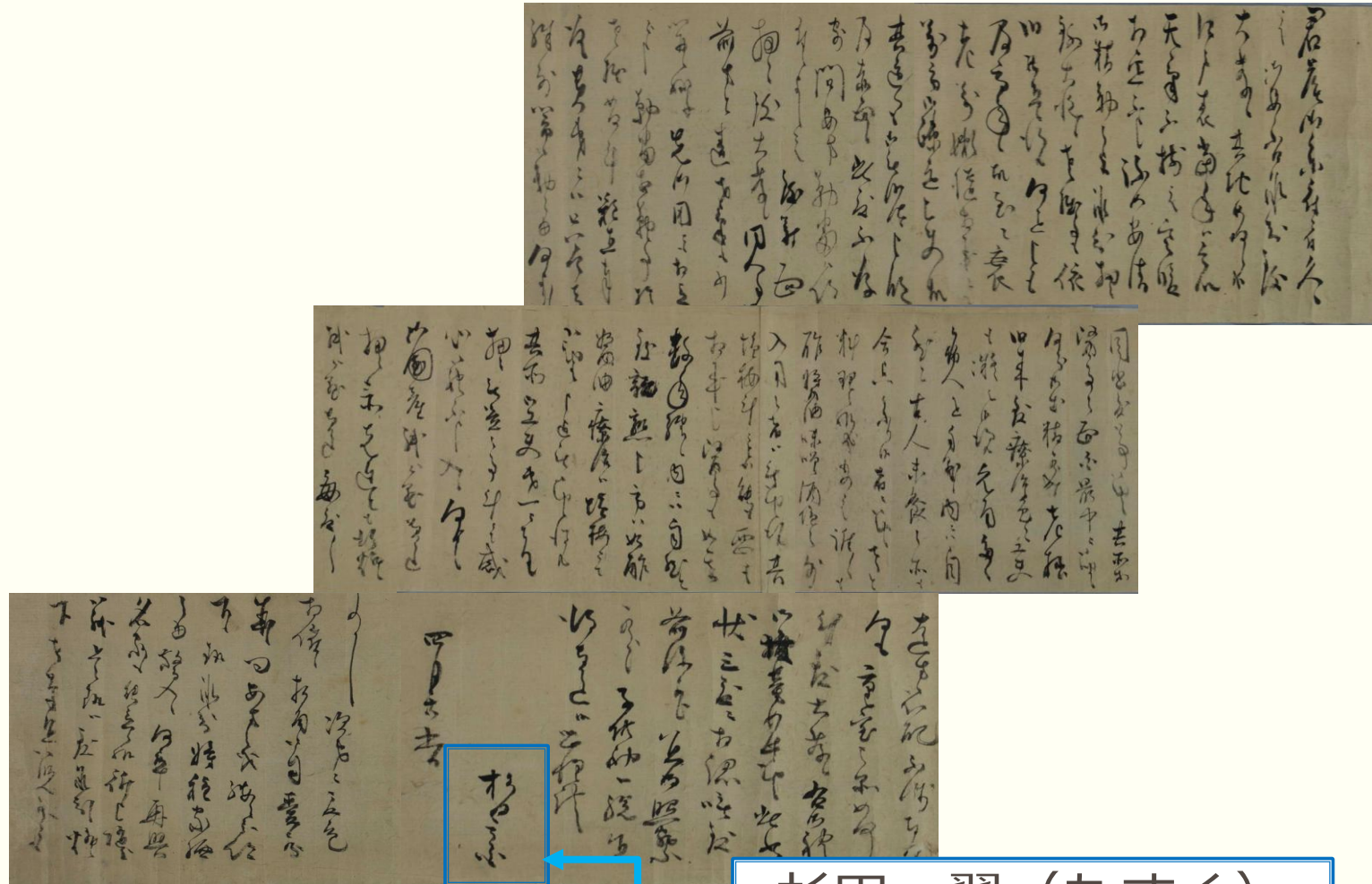
15×138 cm (巻紙)

文化 13 (1816)

「玄白いましめの文」といわれるもの。

杉田玄白が親しい弟子に宛てて、贈り物にお礼を述べ、あわせて治療の秘訣を料理に例えて、丁寧に諭した長文の書状です。

玄白の死の1年前、84歳の時に書かれたもので、末尾に「老年で根気がなくなったため、三度に分けて書いた。文が前後しているであろうから、よろしく判読してくれるように」とあるとおり、3回に分けて書き継がれています。



杉田 翼（たすく）  
\* 玄白の諱



# 医戒 (済生三方附録)

(独) 扶歇蘭度[フーヘランド] 原著 杉田成卿 訳  
嘉永2 (1849) 刊 (天真蔵版) 26×18cm  
原本：C.W.Hufeland原著の蘭訳本  
「Enchiridion Medicum 1838」からの重訳

ドイツの内科学者 Chrstoph Wilhelm Hufeland (1762—1836) の著作「医学便覧 Enchir-idion Medicum」を杉田玄白の孫である蘭学者杉田成卿が翻訳したもの。

「医師の義務」の章が「医戒」として翻訳され、医師のあるべき姿を示しています。



病メル者ヲ見テコレヲ救ハムト欲スル情意。是即  
医術ノ由テ起ル所ナリ。今モ仍医宜ク此心ヲ以テ  
本トスベシ冀クハ医術純正貴靈ニシテ而シテ施ス  
者モ受クル者モコレニ因テ真福ヲ得ム。  
他ノ為ニ生ジテ己ノ為ニセズ是即医業ノ本躰ナリ。  
故ニ安逸利益歡娛快樂ヲ損(そこな)テ。己ノ健全  
生命ヲモ顧(かえりみ)ズ。更ニ名譽ヲサエモ  
擲(なげう)ツテ其最貴ノ目的ニ従事スベシ。目的ト  
ハ何ゾ。他ノ生命健康ヲ救全スルノ一途ノミ。

# 養生訓

8巻4冊

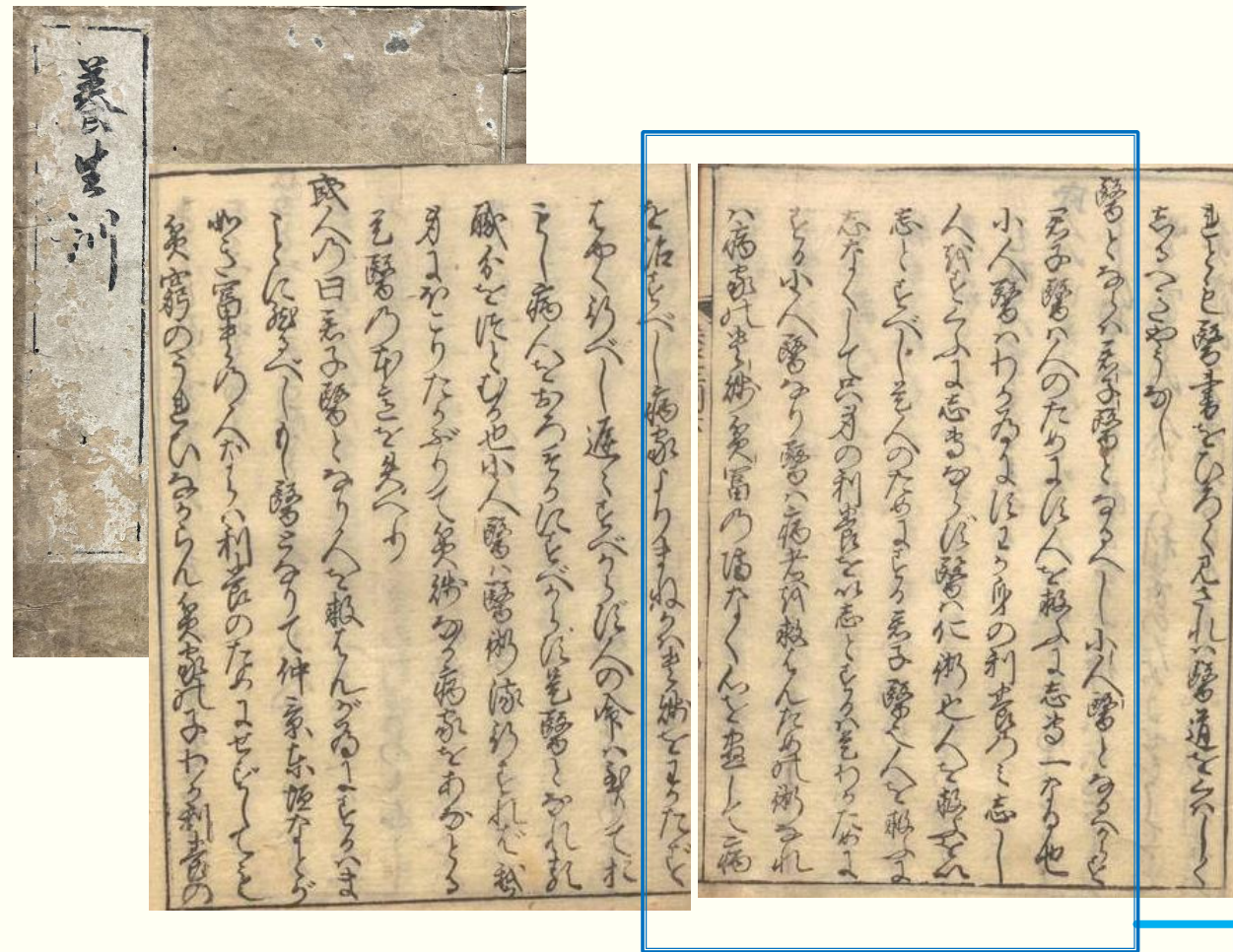
貝原 篤信〔益軒〕 著

〔京都〕 永田調兵衛 正徳3（1713）刊22.5×15.5cm

第六巻の「択医」の章で、「医者をよく選ばなければならない」として、医師の選び方を挙げています。また、医師としての心がけ、医学の学び方などについて、述べています。

医とならば、君子医となるべし。小人医となるべからず。

君子医は人の為にす。人を救ふに志専一なるなり。小人医はわが為にす。我身の利養のみ志し、人を救ふに、志専ならず。医は仁術なり。人を救ふを以て志とすべし。是、人の為にする君子医なり。人を救ふ志なくして、只、身の利養を以て志とするは、是、わが為にする小人医なり。医は病者を救はんための術なれば、病家の貴賤貧富の隔てなく、心を盡して病をなおすべし。



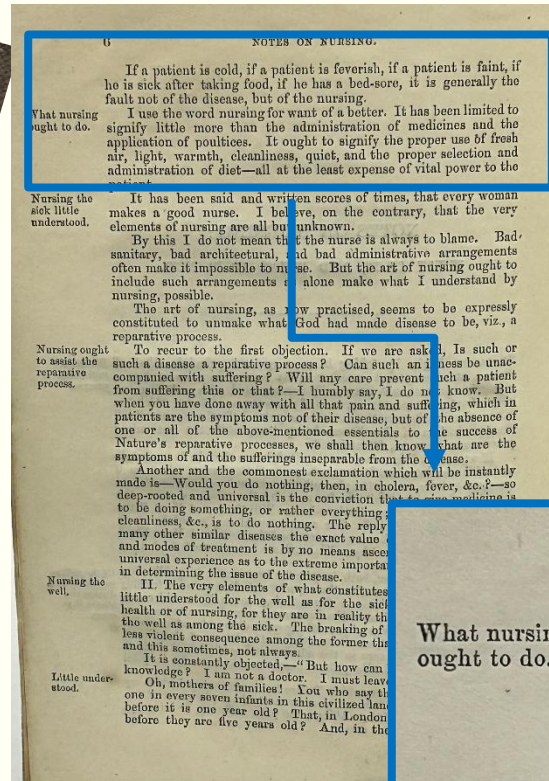
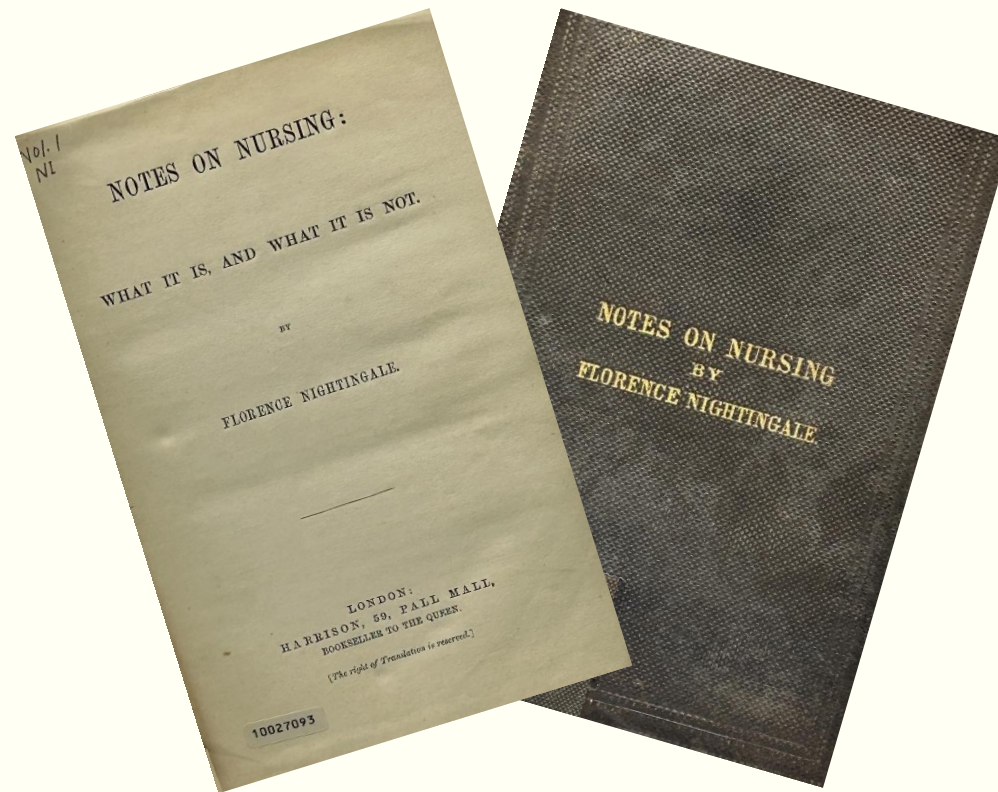


看護のはじまり

# Notes on nursing :what it is,and what it is not (看護覚え書)

by Florence Nightingale  
Harrison, Bookseller to the Queen,1860

1859年にフローレンス・ナイチンゲールが、  
看護師や家庭内で家族を看護する人のために看護に  
ついて著した書です。今も世界中の看護師を志す  
人々に読み継がれている古典的名著です。  
医学情報センター所蔵本は、ごく初期の1860年に  
発行されたものです。



序章において、看護に求められる  
すべてのことは患者の生命力の  
消費を最小限に留めることだと  
述べられています。

If a patient is cold, if a patient is feverish, if a patient is faint, if  
he is sick after taking food, if he has a bed-sore, it is generally the  
fault not of the disease, but of the nursing.

What nursing  
ought to do. I use the word nursing for want of a better. It has been limited to  
signify little more than the administration of medicines and the  
application of poultices. It ought to signify the proper use of fresh  
air, light, warmth, cleanliness, quiet, and the proper selection and  
administration of diet—all at the least expense of vital power to the  
patient.



# 参考文献

---

■横浜市立大学医学情報センター古醫書目録

大島智夫 横浜市立大学医学情報センター [ほか] 編 横浜市立大学医学情報センター, 1998.10

■日本医史学雑誌 第67巻第4号(2021) 375-397

村松洋 "『解体新書』究理堂系書入れ本について"

■日本医史学雑誌 第8巻第3・4号(1958) 3-43

杉田玄白140年忌記念特集号“杉田玄白史料解題”

■養生訓（講談社学術文庫）

貝原益軒著;伊藤友信全現代語訳 講談社, 1982.10

■看護覚え書：看護であること看護でないこと 第8版

フロレンス・ナイチンゲール [著]；湯楨ます [ほか] 訳 現代社, 2023.1